



Title	Fabel と Märchen :ルターの場合
Author(s)	塩谷, 饒
Citation	独語独文学科研究年報, 創刊号, 1-15
Issue Date	1974-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26447
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P1-15.pdf



Fabel と Märchen

—— ルター の 場 合 ——

塩 谷 饒

今日では文学上のジャンルとして解される Fabel および Märchen という語がルターとどんな関係にあるかを考察し、意味論上の問題に触れるのがこの覚え書の主旨である。

1. ルター と Fabel

ルターが1530年のコーブルク滞在中に手がけたイソップ物語りの翻案は、彼の根本思想を直接に表現した文献ではないから、ルター思想研究者たちからあまり顧みられないようであるが¹⁾、いわゆるゲルマニストには興味ある資料と言えよう。これはルターの生前には印刷されず、死後十余年を経て1557年によりやく公刊された次第だが、およそ読者を予想して執筆した文書はただちに印刷に付したルターの場合としては珍しいケースである。それよりさらに注目に値するのは、この翻案の原稿が彼の死後3世紀半を経て(1887年)から、なんとヴァチカンの図書館に保存されていたことが分ったという事実である。これによって、ルター文献の手稿と印刷の関係——綴り、語法、措辞の異同——を明らかにする貴重な資料がつけ加えられることになった。ヴァイマル版ルター全集50巻(1914)に収録されたE. Thieleの業績や、W. Steinberg がまとめたルターの Fabel (Halle, 1959)などはまさにこの発見をふまえての基礎的な仕事にはかならない。

ルターは平生からイソップ物語りに強い関心を寄せていた。これは聖書の講解や知人にあてた書簡からうかがわれるところであり、<からすと狐>とか<蛙とねずみ>とかいう一つ一つの話を種にして教訓や諷刺を述べたことが卓上語録の随所に見出される²⁾。従ってザクセン侯に指示された不本意なコーブルク滞在の時を有意義に過すため³⁾、自ら翻案の筆をとったことも、またこれに執筆の理由を明らかにした序を冠したことも別に不思議ではない。すなわち、ルターはその序文の中で、自分はこの世に処する上で聖書のほかにこの物語りほど Nutz, Kunst, Weisheit を提供してくれるものを多く知らないと言い、素朴単純な話の中に示唆に富んだ教訓がひそんでいと述べている。そして、単に青少年が面白い読みものと思うだけでなく、成人もその鋭利な真理を破顔のうちに、実は胸をつかれる思いで、学びとるテキストだと論じている。ただどうしてもルター

が自ら筆を執る必要を感じたのは、「いわゆるイソップ物語りとして流布した本の中には、いたずらに興味本位に墮したものが増え、素朴な人がそこからあやまらずに知恵を学ぶこと阻んでいる」からであった。その翻案に当って彼がとくに意を用いたのは、まったく *feine, reine, nützliche Fabeln* にすることであった。

そもそもドイツの宗教改革をはさんだ時代の詩人たちは、この動揺期の世相を鋭く見究め、民衆に教訓を与えようとする傾向が強く、見方によっては *Fabel* とも言える（諷刺）詩を好んで書いていることは、ブラント、ムルナー、フィッシャーらの例を見ても明らかである。それゆえ、教訓的な効用を主眼としたルター作品が、それだけの理由で文学性を欠いているとは言えない。イソップ物語りだけに限って見ても、シュタインハウエル、エラスムス、ハンス・ザックス、ヴェルディスなどが競って翻案しているのだから、それらと比べてどの点にルター・ファーベルの文学的特質があるかを吟味すべきであろう。

まずルターがきわめてユニークだと判断される点は、上述の序において作家論とも言うべき議論を展開し、イソップ物語りの作者の歴史的な存在を疑ったことにある⁴⁾。つまりルターは、当時伝承されたイメージに基づくイソップなる野人 (*Tölpel*) がこういう作品をものにしたはずはなく、むしろこれを編集した賢者たちが、真理を馬鹿げた人物の衣に包んで老若男女に平易に伝えるため、ことさらにイソップの名を冠した編集を行ったのだと言う。なお彼は、イソップ物語りの中に古い話と新しい素材があることに気付き、この種の物語りは民間において年々つけ加えられて量が増す性質のものであり、時至ってある人が集大成して世に発表する傾向があるとする方が信憑性が高いと論じている。イソップ物語りの作者についてはいろいろ議論があるそうであるが、ルターがいわば物語りの分析から著者の歴史性を問題としたことは、一後代においてヘルダーが旧約聖書の雅歌に試みたことに匹敵する——文学史上注目し得る事実だと言えるだろう。

それならば、彼の作品そのものにはどのような文学性が認められるであろうか。その内容は上に述べた「翻案」であって、一般によく知られた動物物語りが主であるから、話の中味そのものに新鮮さがあるとは言い難い。

しかもルターは翻案にあたってラテン語の流布版を参考にしたばかりでなく、とくにシュタインハウエルが15世紀の後半にドイツ語散文に訳したイソップ物語りを直接参考に資したことが認められている。それにもかかわらずルターの翻案は *Volkstümlichkeit* という一貫した性格において優れており、聖書の翻訳や讃美歌の翻案などで示した力量がここにおいても発揮されているのである。この場合は、素朴な筋の運び方、用語の一般性、朗読に適したリズムミカルな文体などにルターの周到な配慮がうかがわれる。たとえば、*Vom Hunde im Wasser* の手稿は次の

よりになっている。

Es lieff ein hund durch ein wasser strom vnd hatte ein
stuck fleischs ym maul / Als er aber den schemen vom
fleisch ym wasser sihet / wehnet er / Es were auch fleisch
vnd schnappet gyrig darnach / Da er aber das maul auffthet
/ entfiel yhm das stuck fleischs vnd das wasser furets
weg / Also verlor er beyde fleisch vnd schmen

この文ではschemen(=Spiegelbild, Schatten)だけが今日使わない単語であるが、あとはNhd. とほとんど同じで、綴りの特異な点も除けばそのまま現代において苦もなく理解されることは、Essenの直した形を見れば明らかであろう。

Es lief ein Hund durch einen Wasserstrom
und hatte ein Stück Fleisch im Maule.
Als er aber den Schatten vom Fleisch im Wasser sieht,
denkt er, es wäre auch Fleisch,
und schnappt gierig danach.
Da er aber das Maul auftat, entfiel ihm das Stück Fleisch,
und das Wasser führte es weg.
Also verlor er beides,
das Fleisch und den Schatten.

シュタインハウエルの訳は上部ドイツ語に偏し、広い読者層を得るものではなかった。

また同じ内容のこともルターに比べて冗長な文で表わし、20数語多く使っている。この点に関してはエラスムスやヴァルデイスはさらにひどく、韻文である上にルターの約3倍の語を使用しているのである。逆に言えばルターの方が簡潔な文体で、それだけ大衆向きである。彼の文が朗読に適していることは、息の段落を配慮した句読符と接続詞による文の結合形式から察せられ — 上のEssenの現代語訳⁵⁾での行の切り方が具体的にそれを示している — 、また強音と弱音の律動的な交代からも看取できる。これらの特色は全篇(14篇)を通じて認められる。なおルターのイン

ップには各篇の終りに教訓が添えられているが、それは知恵者の理屈でも道学者の説教でもなく、格言をはめこみながら行った短言の説明である。たとえば、Vom Kranich und Wolffe (つると狼)のあとには、

Diese Fabel zeigt :

Wer den Leuten in der Welt wil wol thun / der mus sich
erwegen Vndanck zuuerdienen / Die Welt lohnet nicht anders
/ denn mit Vndanck / wie man spricht. Wer einen vom Galgen
erloeset / Dem hilft derselbige gern dran.

(この世で人に善行をほどこそうとするものは、恩知らずの目に会う覚悟がいる。世間の報いるところは忘恩のみ。諺にいわく、絞首台から救け下ろしてやる者は、己がそこにかけられるはめになる。)

と記している。ところが、ヴァルデイスは実に4倍の語を費して説教に及んでいる。ルターは世相をきびしい眼で観察し、この世には虚偽・暴力・忘恩が横行する発言をくり返し行っているが、Fabelもそれらに対する警告の材料として利用していることは各篇のまとめからよくかわれる。中にはルターの価値観が、現代において常識的に通用するモラルとずれている点もなくはない。しかし、それはまたそれで、当時若くはルター個人の考えを示すものとして見逃せない。たとえば、ルター原稿にあって印刷から除れたモーゲンホーファー博士という一篇がある。それは皮剥ぎに「商賈繁昌」と挨拶された大博士が、「私とおまえの仕事にどんな関係がある」と言ったところ、この男は「先生は法律家で、わしは皮剥ぎでさ。つまり、わしは死んだ犬の皮を剥ぎますが、先生は生きた人の皮を剥ぎなさる」という内容のものである。我々はこの法律家も皮剥ぎだという点にうがった世相の観察を感ずるのだが、ルターのまとめは「不作法で頭の悪い連中は重んずるに足りず、答えてやる必要はない」と言うのである。

ルターのFabelについては、内容としても語法の上でも論ずべき点が多々あるが、以上の叙述によっても宗教改革者のこれに寄せた関心と、作品として見た特色の輪郭は浮彫りにされたと思う。

さて、ラテン語fabulaに基づくFabelは、Trübnerなどの歴史的な辞典の記載によれば、直接に原語からドイツ語に入ったものでなく、古代フランス語のfableの借用語としてMhd.に現われ、ゴットフリート・シュトラースブルクの「トリスタンとイゾルデ」でも使われていると言うことである(Trübner参照)。それはもともと広く「お話」というほどの意味であったが、

一方においては形が整えられた物語りを指すようになり、他方では現実性を欠いた話という方向に発展した。しかるにラテン語の *fabula* 自体が狭義においてはイソップ物語りを指したから、ドイツ語でもそれと分ることが多かったと察せられる。ルターの場合もそれに準ずるわけであるが、また広く物語りを指しているときもあり、さらには虚構の面をとらえて言うこともあるので、これらの関係はあとの項目で例示した上で整理して見よう。

2. ルターと Märchen?

ルターが幼時に、後のグリム兄弟が集拾整理したような Märchen に進んで耳を傾けたことがあるのか、これについては別に記録がないので知るよしもない。ただし、とくに詩人としての自覚に生かされず、もっぱら福音の説教・民衆の教化に文書を利用したルターが、Märchen に類する物語りをあえて創作する意志を持っていなかったことは確かであると言えよう。

それにしても Märchen という語はルターでどのような意味を持っていたのであろうか。これも考察に値する問題である。なぜなら、ルターにおいては Märchen の基語 Mär がなおふつうに使われていたので、それとの関係の吟味が必要になるからである。しかも、一方において Mär の縮小形は、今日の共通文語で一般に使用されている Märchen という形を示さず、いわば妹妹語とも言うべき形をとっているからである。

現代のドイツ語においては、Märchen は臨機に使用される縮小名詞と感ぜられることなく、Mädchen なみの独立語として扱われている。これに対してその基語である Mär <知らせ、話、うわさ>の方は、現在日本で発行されている中型の辞典に一樣に記載されているものの、大ていは古語とか、擬古文で使用されると説明が添えられていて、ふつうの基本単語に入らないことが察せられる。ドイツの辞典でも、たとえば Trübner (1948) には「今日では南ドイツ方言で *was ist der Mär?* = *was geht da vor* などと使われているが、そのほかでは廃れている」と記述されており、Wahrig (1968) のような現代語辞典には古語の記号があり、「今日なお scherzhaft に」使用される旨が明らかにされている。

そもそも <知らせ、話> という意味の Mär はゴート語の *marjan* <伝える> とも関係があり、Ahd. では *marī* であったが、Mhd. では幹母音がウムラウトし、また末尾の *i* が弱音化して *maere*⁶⁾ となり、女性または中世の名詞として用いられた。中世の詩人たちが好んで用いたことは、少し中高文学に触れたものならばじきに気付くところであろう。たとえばニーベルンゲルの歌の出だしは、

Uns ist in alten maeren wunders vil geseit ………

(くすしきことのみまた、昔の話に言い伝えられ ………)

となって居り、またその終りは

hie hat daz maere ein ende ; daz ist der Nibelunge liet.

(これにてこの話は終る、これすなわちニーベルンゲンの歌)

と締めくくられている。

時代を下って近代初期のドイツ語でもまたふつうに使われていたことはGoetzeのグロッサル
の記載やグリムの辞典の例証などから察せられるが、ルターにもいくつかの例があることが知られ
ている。現代とのつながり言えば、彼がクリスマスに子供に歌わせる目的で作詩した Vom
Himmel hoch の用例をあげるのが適切だと思ふ。すなわち、その第一節は

Vom himel hoch da kom ich her,
ich bring euch gute newe mehr,
der guten mehr bring ich so viel
dauon ich singen vnd sagen wil.

という句である。(newe mehr = neue Mär) これは学者たちの指摘するように⁷⁾、当
時の民謡の出だしにヒントを得た可能性はある。だが全体の構成は、福音書の降誕物語りのワク組
を童心に訴えるため思い切ってドラマ化したものであって、そこには生々とした筋の発展が認めら
れる。従って、内容的には純粋にルター的な信仰告白が認められると言われるにもかかわらず、多
少の修正をほどこしただけでほとんどすべての句節をとり入れたカトリック側の讃美歌も現われる
ほどであった。ルターの原作は新教讃美歌集に収められて歌いつがれて来たが、——今はむしろ現
代の正書法と語形によっている——このよいMärを伝えるという歌の調べは、ドイツ語国民の信
仰の対立を超えて、それどころか、信仰の有無を超えて、その聖書的メーレンとも言える調子
の句節ともども一般に広く親しまれているのである。この点に関する興味深い傍証が1778年に
刊行されたアーデルング(Chr. Adelung 1734-1806)のドイツ語辞典に見出される。
すなわち、そこではMähre (= Mär) は非常に古びた語だと記されて居り、その例として

Vom Himmel hochからの一行ich bring euch neue gute Mär が引用されていて、「古いWeihnachtslied」の中で使われている旨の説明がある。これによってMärに対する当時の言語意識がうかがわれるばかりでなく、またこのリート作者が問題にされないほどの普及ぶりが察せられるのである。しかるにアーデルングが辞典を発刊したころ、ドイツ文学の黄金期をもたらした上、文語共通語の確立にあずかったゲーテとシラーがともにこの語をその代表作に使ったことも興味深い事実と言えよう。

ゲーテはファウストの1423行において、主人公ファウストに

So bleibe doch einen Augenblick
Um mir erst gut Mär zu sagen

(それにしてもちよいと位好ささうなものだ。面白い話が聞きたいのだが — 森 鷗外訳)

と言わせ、また2914行ではメフィストフェレスに

Ich wollt, ich hätt eine frohere Mär!
(もっとめでたいお知らせだと好いが — 森 鷗外訳)

と述べさせている。このMärはルターのWeihnachtsliedに見られるformelhaftな表現だと説明する注解者⁸⁾がいるが、とにかくゲーテが時代的にはルターの頃を背景とする作品の主要人物の口を通してこの語を使ったことは印象的である。ことに2914行の方は、ウルフェウストにおけるfrohe Märを比較級の形に直した工夫のあとが見られ、一応神妙に聞えるセリフは、実は「もっとめでたいお知らせ」など持ってくるはずのないメフィストのしらじい言葉であることが観客や読者にはすぐそれと分るだけに、きわめて上手な使い方だと思われる。一方、シラーも詩Ring des Polykratesの中で

Mich sendet mit der frohen Mär
Dein treuer Feldherr Polydor

(陸下の忠義なポリュドル將軍が私に吉報をもたせて遣わされたのです。)

と使っているが、これらのgut-froh-neuなどと結合したformelhaftな形を脱し、全然

マイナスな方向の形容詞を先行させて劇的な効果を狙った場合もある。すなわち、戯曲オルレアン
の処女の序幕第2場で

Die Aeltesten im Dorf erzählen sich
Von diesem Baume schauerhafte Mähren;

(村の故老たちは、この木にまつわる身の毛もよだつうわさを語り合っている)

という具合に。

ゲーテやシラーに続く時代の詩人たちの中にもこの Mär を <知らせ、うわさ> という意味で使
った人たちがいるが、日常語として一般に用いられるには至らなかった。

ところで、Mär(e) の縮小形 Märchen は、15世紀の半ばに merechyn という形で、ま
た意味も基語に直接連るものとして現われたと言われる⁹⁾。すなわち、<ちよとした知らせ、う
わさ> が元来の意味であったが、次第に <あやまって伝えられた話、本当ではない話、作り話> と
いうようなニュアンスの語になって行った。たゞルターの場合には、縮小形に限って上部ドイツ
語で用いられている -lein 系の後綴となることが圧倒的に多く、しかも大ていの場合には重母音
化しない -lin となっている¹⁰⁾。従って、彼の言語では Märchen の姉妹語 Märlein 系の
merlin という形が現われて来るのである。グリムの辞典には 1825 - 28年の De Wette
版ルター著作集から引用した3箇の例が出ているけれども、いずれも <真実性のない作り話> と
いう意味を示している。ところが、この虚構は自明の前提として、その効用性が認められる <お話>
として、つまり Fabel と同じ次元の語として使われている場合もある。すなわち、ルターは上述
のイソップ物語りの序言で、「この Fabel または (= oder) Merlin の本はきわめて評判が
よく……」と書き出し、少しあとで「なぜなら、我々は幼い子どもと若い人たちが Fabel と
(und) Merlin によってたやすく動かされ……」と述べている。はじめの文は明らかにイソ
ップ物語りを指して居り、あとの方は一般的な使い方をして居るが、いずれにせよ、類語に属する
名詞を重ねて説得力を強めようとするルターの修辞法を示す具体例である。しかるにまた、ラテン
語あるいはギリシア語など古典語といわれる言語を使った場合に、本来のドイツ語によってすぐふ
えんすることも彼の文体論の特色だと言える。(その場合はむしろ文全体の中で重要な概念を持っ
てもつものに限られているが。) さて、ここで引用した例の最初の方は Merlin が oder で結ばれ
て居り、Fabel の言い換えであるが、あとの方では und が介在している。そこで、両語には意
味上明白な差があるのかという疑問も生ずる。しかし、このような並列もルターの言語には数多く

見出されるから¹¹⁾、そのまま今日の文学上のジャンルとしての Fabel と Märchen の差をはっきり意識した表現とは認められない。それよりも、ルターが Merlin とふえんしたことによって、この語が一般大衆に〈物語り、お話〉という意味に解されていたことが分るのである。またその限りにおいては、Mär との直接的なかわりを持たないことも察せられる。こういう次第で、ルターは一応 Märchen そのものとは縁がないようだが、基語と姉妹語の生きた使用によって間接的にこれとつながっているとと言える。

3. ルター訳聖書における両語

ルターは聖書の翻訳においても Fabel と Merlin という語を使っている。これらの語ははたして原典でのちがいに対応しているのだろうか、また旧新約にまたがって現われる両語にドイツ語として意味の差がそれぞれ認められるのか、この点を検討して見よう。それはルターの翻訳のセンスにかかわる問題であるが、そこには意味論上の問題もある。

a) 旧約聖書での用法

まず両語がどのような文中で用いられているのか、ルター訳と日本語の口語訳での対比によって考察しよう。

Merlin : Nun bin ich jr Seiten spiel worden / vnd mus jr
Merlin sein (それなのに、わたしは今彼らの歌となり、彼らの笑い草となった。
ヨブ記 30 : 9)

Fabel : Vnd Jsrael wird ein Sprichwort vnd Fabel sein
vnter allen Völckern. (そしてイスラエルはもろもろの民のうちにとわざとなり、笑い草となるであろう。列王紀上 9 : 7)

日本語ではルターが Merlin ~ Fabel と分けたところはともに〈笑い草〉という表現になっている。なお Fabel は歴代志下 7 : 20 とエレミヤ書 24 : 9 に現われる。これに対して日本語は〈笑い草〉と〈あざけり〉と使い分けている。そこで、原語と訳語との対比を表にして見よう。

	(ヨブ記)	(列王上)	(歴代志下)	(エレミヤ)
1. ルター訳	Merlin	Fabel	Fabel	Fabel
2. ヘブル語	milla	shenina	shenina	shenina
3. Vulgata	proverbium	fabula	exemplus	proverbium
4. 日本語	笑い草	笑い草	笑い草	あざけり
5. Menge 訳	Gerede zur Kurzweile (als Ziel- scheibe)	Spott	Spott	Spott
6. Zürich 聖書	Gerede	Spott	Spott	Gespött
7. オランダ語	klapwoord	spotrede	spotrede	spotrede
8. フリジア語	skimpwurd	spotlied	spotslach	spotslach
9. AV と RV	byword	byword	byword	taunt
10. RSV	byword	byword	byword	taunt

この表の5から10までには、いわゆる西部ゲルマン語派の言語の訳から、きわめて代表的なもの選ばれている。すなわち、5. Menge 訳はルターの影響を受けずに訳出されたもっとも語学的に信頼度の高い訳であって、20世紀前半の言語状態を示すものと言える。6. Zürich 聖書は一般に Menge 訳よりも現代文に近い。7. オランダ語は文語の成立に大きな影響を与えた欽定訳 *Statenbijbel* である。8. のフリジア語は1947年にオランダ聖書協会から発行されたものであるが、言語的に独自性を持つフリジア系住民の通常使用するものである。9. AV と RV は *Authorized Version* と *Revised Version*、10. RSV は *Revised Standard Version* の略記であるが、これらの聖書がそれぞれに英語国民の間で親まれていることは付言を要しないであろう。

ところで、これらの中で原語での区別を顧みず、また原文での同じ語に異なる表現をあてているのは、日本語訳と英語訳である。日本語訳がいろいろの点で英訳をよく参照しているのも、これも偶然的の符合ではあるまい。その意味の差がきわめて大きなものでないことは、*Vulgata* においても同じ訳をあてている箇所があることから察せられる。それにしても原典からのゲルマン語への

直接の翻訳に先鞭をつけたルターが、原語でのちがいに別の訳語をあてたことは注目に値する。その意味の差は、英語を除いたゲルマン諸語訳に見られるように、—そしてとくに Menge 訳においてははっきり説明されているように、—ヨブ記の方は〈うわさ話〉、列王記その他の場合は〈嘲り〉という方向において認められる。ルターがヨブ記で Merlin を使ったのは、それによって Mer の単なる物理的な少量〈ちょっとした知らせ〉を表現したのではなく、縮小のあとつづりによって軽侮の意味を添加し〈つまらぬうわさ話〉というニュアンスにしたのである。

このような臨機の情緒的な縮小あとつづりの用法は、ルター語法の一傾向と言える。

一方において、旧約聖書で使われた Fabel は、むろん寓話とか、お話という意味を示しているのではなく、〈言い伝え〉という語義に連る用法であろう。〈嘲り〉の意味はむしろ文全体の中から自然に感じ取られる。そこには Sprichwort 〈ことわざ〉という語が先行しており¹²⁾、ルターは〈言い伝え〉という意味の Fabel を使うことによって、意味論的に同次元の語をたたみかけるヘブル語の修辞法を、ドイツ語でも効果的にこなそうと試みたのかも知れない。

b) 新約聖書での用法

ここでも両語がどのような文脈で使用されているのか、ルター訳と日本語訳を比べて調べることにする。

Merlin : Vnd es dauchte sie jre wort eben als werens

Merlin / vnd gleubten jnen nicht. (ところが使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。ルカ伝 24 : 11)

Fabel : nicht acht hetten auff die Fabel vnd der

geschlecht Register. (作り話やはてしのない系図などに気をとられることもないように。テモテ前書 1 : 4)

新約聖書では Merlin と Fabel にそれぞれちがった訳語があげられている。Fabel はそのほかテモテ後書 4 : 4、テトス書 1 : 14、ペテロ後書 1 : 16 に現われる。

まず Merlin の対照表を作れば次の通りである。

1. ルター訳	Merlin	6. Zürich聖書	leeres Gerede
2. ギリシア語	lēros	7. オランダ語	ijdel geklap
3. Vulgata	deliramentum	8. フリジア語	idelpraet
4. 日本語	愚かな話	9. AVとRV	idle tale
5. Menge訳	leeres Gerede	10. RSV	idle tale

ルターがMerlinと訳した原語lērosは近代ゲルマン諸語の同じような表現から察せられるように<内容のない話、馬鹿馬鹿しくて信ずるに足りない話>を意味している。New English Bible(1970年の2版)では大胆にもnonsenseと訳されている。ここでもルターは軽蔑的な意味を含めて縮小のあとつづりを用いているが、全体の語義は明らかにヨブ記とは違っている。そこでは、たしかにとりとめもない話してあるが、言いはやされるものであり、座興に供せられるものであった。ところが、ルカ伝の方はまるで理性が受けつけない話であり、基語の第一義<知らせ>の線に連りうるものだが、人々にはそのまま伝わることのないものとして使われている。

一方において、ルターがFabelと訳した語はmythosと言い、現在のドイツ語のMythe、英語のmythのもとになっている語である。Vulgataではfabulaをあてているが、近代ゲルマン語訳では—英語も含めて—みなこれに因んだ形Fabel(独、オランダ語、フリジア語)、fable(英)を示しており、旧約聖書の場合とちがって、上表に掲げた諸訳では原語との対応にも何らの混同が起っていない。たゞNew English Bibleでは、テモテ前書とテトス書においてはmyth、テモテ後書ではmythologyというように、ギリシア原語と形の上での共通性も示しながら、一方においてペテロ後書ではtales artfully spunと訳出し、文脈によって異なる表現を行っている。しかしながら、原語のmythosは今日のヨーロッパ諸語で使われているような神話という意味に限定されていたわけではなく、史話に反して歴史的事実の裏付けが充分でない話として広く用いられた語である。さらに、上記新約聖書の箇所はいずれも<創世紀の創造物語りに加えたグノーシス的な解釈>¹³⁾を指しているのであるから、これらの書簡の著者たるパウロやペテロの立場から見ればことごとく<虚構>と断ぜられることになる。それゆえ、どの場合もラテン語fabula(それはVulgataで一貫して用いられている)に基づくFabel~fable系の表現を一貫して使ったことは筋が通っており、また日本語訳で<作り話>と言うのも、聖書成立の事情を心得たものにはそれと察せられ、即興的なでまかせの話とは取られないのである。

c) ま と め

ルターは造語の達人であったが、FabelとMerlinに関しては彼の新に鑄造した語ではなく、既存の語を使用したに過ぎない。そして、Fabelはそのまま今日の文語に引き継がれたのに対して、Merlinはルターに見られるほかの多くの語とともに、今日では使用されなくなった語である。現在ドイツで用いられている<ルターによる>聖書では、現代の綴りに改めてMärleinと記されているが、ふつうには使われることがない。一方において、共通文語に定着したMärchenは——必ずしも意をつくしているとは言い難いが——童話と日本語で呼ばれる文学上のジャンルとなったため、現行の聖書に持ちこめなくなった。ところで、文学の用語として厳密に区別されているFabelとMärchenは、比喩的に使われると両方とも<虚構・作り話>を指し、かえって本来の意味に近づくのはきわめて面白い。上に記したように、ルターでは<お話>という場合にFabelとMerlinの意味上の境界がとれて同一扱いされている。ただし、それは<作り話>という前提に立っても悪いものではなく効用の認められるものであった。しかるにルターは聖書では原語に応じて訳しわけ、しかも旧新約ではそれぞれ違った意味のものに当てている。これは一方においてルターの原語に対する知識を示すとともに、他方では一つの語が場合によっていくつかの意味を持ちうることの証左でもある。もっとも、FabelもMerlinも口で伝えられることの意味に限定されているから、明確な意味論上の対立というよりはニュアンスの差と言った方が適切かも知れない。つまりその差に着目すると

- イ) Merlinは個人のことに関する限定された範囲での話であるのに、
- ロ) Fabelはステロタイプの表現また話として弘布されたものであり、
- ハ) 旧約での両語は<嘲り>に供せられたものであるのに比し、
- ニ) 新約での両語には<非合理性>が指摘されることが分る。

なお、ルターは事実に関する話はGeschichte¹⁴⁾と訳している。それが言い伝えられた場合にはSage¹⁵⁾を当てることもある。さらにイソップの序ではLegendeという語も今日同様の意味で使っている。

(注)

- 1) たとえばK. Alandが刊行(1969年)した現代語版ルター選集10巻の中には採録されていない。
- 2) Steinbergの上掲書の序(S. XI - XII)には、イソップ執筆の意志を表明した書簡や、イソップ物語りに触れた聖書講解の出典も詳細に出ている。またヴァイマル版ルター全集(WA)のTischredenのBd. 1(445), Bd. 2(1549), Bd. 3(3490, 3663), Bd. 4(4085), Bd. 6(6523)にはイソップに関する発言が記録されているが、個々の話を題材としたことは枚挙にいとまがないほどである。
- 3) Steinberg : S. XI
- 4) A. Berger(Grundzüge evangelischer Lebensformung nach ausgewählten Schriften Martin Luthers, Leipzig, 1938, S. 70)によれば、ルターは根拠をあげてイソップの存在を疑った最初の人であると言う。
- 5) O. Essen : Grundzüge der Hochdeutschen Satzintonation (Rattigen/Düsseldorf, 1964) S. 69 - 70。ここでは全文のイントネーションカーブを示す記号(同時にアクセント符合)が添えられており、これらに従って読むとその朗読向きであることが確かめられる。また、W. Kuhlmannの編集したDeutsche Aussprache, Lehr- und Lesebuch für Ausländer(Freiburg, 1958)の読章部の冒頭に「イソップによる」としてこの話がÜbungにあてられているが、実はほとんど「ルター」によると言ってもいい文であって、ルターの文の律動性をじゅうぶんに物語っている。

なお、シュタインハウエル、エラスムス、ヴァルディスラのイソップはSteinbergの本の中にルターのそれと対比されている。
- 6) Mhd.におけるaのウムラウトはしばしばaとeの合字(英語hatのaを表わす発音記号に使われるものと同じ)で表わされるが、この文では印刷の都合上別々にした。
- 7) O. Schliesske : Handbuch der Lutherlieder(Göttingen, 1948), S. 305 ; K. Aland : ルター選集6巻, S. 345 ; WA Bd. 35 (S. 260)のW. Mückeの解説参照。
- 8) たとえば、K. J. Schröder(Faust von Goethe, Leipzig, 1907)やE. Schmidt(コッタ版ゲーテ全集13巻)の当該箇所の説明。

- 9) Kluge-Mitzka ドイツ語源辞典(1967, Berlin S.461) の記述参照。
- 10) ルターの縮小後綴についてはドイツ文学研究第15号(1967年)に発表した拙論「FräuleinとMännin — 造語に関する一考察 —」のS.29ff. で詳しく論じられている。
- 11) C. Franke : Grundzüge der Schriftsprache Luthers, Zweiter Teil(Wortlehre), Halle 1914, S. 78 には多くの例が挙げられている。
- 12) ルターはFabelと訳したshenina に対してたまに(原意にそって)Spottを当てている。Vnd wirst ein Schewsal / vnd ein Sprichwort vnd Spot sein vnter allen Völckern (あなたは……もろもろの民のながで驚きとなり、ことわざとなり、笑い草となるであろう。 — 申命記28:37)
- 13) たとえば、NTD(Das Neue Testament Deutsch 新約聖書注解双書) Bd.9 S. 11 ff.におけるJ. Jeremiasの解説やBd. 10 S. 101でのJ. Schneiderの説明参照。
- 14) 日本語聖書の創世記15:1, 22:1においては、これらの「事」とあり、歴代志上19:29、同下12:15には「終始の行為」またルカ24:14では「出来事」となっている。
- 15) ルカ5:15での用法は日本語では「評判」と訳されているが、原語では「事実の話」という意味でのlogos(mythosに対して)が使われている。

(文学部教授)